

---

# さくらのたね

蝦蟇仙人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さくらのたね

### 【Nコード】

N4386U

### 【作者名】

蝦蟇仙人

### 【あらすじ】

長い歳月を重ねてきた桜の木。とある小学校の校門近くで生きてきた桜の木にはたくさんのおい出があります。これは、その桜の木と一人の少女の切なくも温かい物語。

(前書き)

この作品も、私が大学の活動で書いた作品です。

## 春 其の壱

私は木です。桜の木です。<sup>わたくし</sup>

とある小学校の校門近くに住んでいる木です。もうかれこれ数十年となりますが、だいぶ長い歳月を重ねた結果、とても立派に育ちました。これもこの地に私を迎えてくれた小学校の先生方や児童の皆さんのおかげだと思っています。だから今はそんな皆さんに感謝の意味を込め、年に一度、この枝いっぱい綺麗な花を咲かせています。桃色に輝く花を風に揺らし、皆さんに笑顔や癒しを届けます。それが私に出来る唯一のことなのです。

特に春には、可愛らしい一年生が両親に連れられ、私を背に写真を撮ります。その時私からは後ろ姿しか見えませんが、写真を撮っている親御さんの表情を見れば、とても良い笑顔になっているのだと想像できます。だから私は身体を揺らし、花弁を舞い散らせます。それが喜びの合図だと気づいてもらえたら光栄です。

私には人のように口がありませんので感謝の言葉を言うことも出来ませんし、また人のように足がありませんのでいつも同じ場所と同じような景色ばかり見えています。でも、退屈だと思っただことは一度もありませんでした。毎日、ランドセルを背負った子供たちが笑顔で通り過ぎるのを見るだけで癒されます。時に泣いて通る子や喧嘩しながら通る子がいますが、私にはどうすることも出来ませんのでただただ身体を揺すります。そのような思い出は、春の花弁よりもあります。

私がこの学校に来て初めて花を咲かせた時、当時の校長先生の話は今でも忘れません。

私は初め子供の背丈ほどの高さの苗でこの場所に植えられました。

それから数年が経ち人の三倍ほどの高さに成長し、ようやく小さな蕾を身につけました。するとそこに校長先生が私の前に来ました。特別何をする訳でもなく、私のことを見上げていました。すると後から当時新米の先生だった風間先生かまへが、後ろで束ねた長い髪を揺らし慌てた様子で現れました。

校長先生、こんなところにいたのですか。もう、捜しましたよ。明日の入学式の打ち合わせが始まるみたいですよ。だから職員室に来てくださいって

しかし校長先生はまったく慌てたそぶりを見せずに、風間先生に向かってこう言いました。

先生、見てください。この桜、ようやく花を咲かせてくれるみたいですよ。このぶんなら春の入学式には間に合いそうですね。その言葉に風間先生も私を見上げます。そして目を丸くし、本当ですと笑みを作りました。

風間先生は昨年来たばかりですから、この桜のことを何も知らないでしょう。ですから少し昔の話をしてあげますね

ゆっくりとした口調で穏やかな雰囲気きづなの校長先生に、先程まで慌てていた風間先生もいつの間にか呼吸も整い、校長先生のペースにまれていました。

『さくら』という言葉にはこの木の桜ともうひとつあるのは知っていますね？

はい。劇場などで観客に交じって座って、役者に声を掛けたりする人の『さくら』ですよ

ええ、そうです。あまり良い意味では使われませんね。人々を騙すという意味ですから。でも何故、そのようなことを『さくら』と言うようになったか知っていますか？

はあ、すみません。ちょっと分らないですね

いえ、別に謝ることではないですよ。その『さくら』という言葉は、『花はただ見る』という意味から、芝居を無料で見る代わりになれ合いで役者に声をかける者を、そのように言うようになった

そうです

そうなんですか

桜の花をわざわざお金を払ってまで見る人はほとんどいませんよ。大抵の人は公園や道端で咲かせている花をただで見ますし

言われてみればそうですね。花屋に行っても、桜の花なんて売っているところ、なかなか見ないですね

ですが、私の父でこの学校の初代校長は、この桜の花が見たくてお金を払い、この桜の苗木を買いました。校長は『さくら』ではなく、ちゃんとした一人のお客としてこの桜の木を見たかったのでしょう。しかし、当時の校長はもうだいぶ高齢でいられたから、桜が苗木から立派に育つ前に亡くなられてしまった。私からしたら本当に悔しくてたまりません

校長先生はうつすらと涙目になっていました。その様子を見て風間先生もどうしたら良いのか分からず、ただ立ちつくしていました。

だから私もこの学校の校長になったのだから、形は違ってもちやんとお金を払って桜の花を見たいと思うんです。もし風間先生がこの学校の校長先生になった時には私と同じようにしてもらえたら嬉しいんですけど

風間先生はもちろんですと答え、二人は校舎の方へ行ってしまうしました。

長いことこの場所にいるせいか、様々な思い出は枯れ葉のように増え冷たい土に変わり、私のことを支えてくれています。

この話を聞いて、今では毎年のように花を咲かせていますが、あの時は何故もつと早く成長できなかったのかと自分を憾みました。その罪滅ぼしというわけではありませんが、私が毎年のように花を咲かせ、この小学校を訪れる人々に見せることが私の生きる使命なのだと感じました。

ただ、それは春という季節だけの話で、他の季節では花を咲かすことも笑顔を作ること出来ません。それはとても虚しいものでした。

特に冬はです。そしてあの出来事が起きたのも冬でした。

## 冬 其の壱

あれは昨年の師走の頃、私の姿はとても侘しいものでした。秋の乾いた風で葉は全て枯れ落ち、細い枝のみを掲げているだけでした。それでも冬という季節は大切なものです。春に暖かくなった時に満開の花を咲かせるために栄養を蓄えなくてはいけません。夏に太陽の光を葉で吸収した分はたくさんありますが、それだけでは足りません。私の太い根からも栄養を吸収しなくてはいけないのです。だから私は冬休みに入った人気がない学校を見ながら、栄養を吸収する毎日を過ごしていました。

そんなある日、一人の少女が私の前に現れました。その少女はこの学校の児童でした。名前は春野歩美はるのあゆみさん。まだ小学二年生でとても小さい子でした。彼女はいつも明るく無邪気で、まだ何色にも染まっていない純粋な瞳の持ち主です。

彼女が私に何の用かを見ると、彼女は風邪を引いているのかそれとも風邪予防なのか、口許に薄い桃色がかったマスクをつけており、揃えた前髪のすぐ下にある丸い瞳だけが際立っていて、まっすぐに私のことを見上げています。私が花を咲かす頃に私のことを見上げる人はたくさんいますが、まだ、枝しかない私を見上げている人を見るのはあまりないことで、こんなみすばらしい姿を見られる思いというのは、私の中に羞恥心を植えつけます。

よく見ると歩美さんの手は手袋をしておらず、先ほどからずっと左手に小さな握りこぶしを作っていました。するとマスクの下からこもった声が聞こえてきました。

「ねえ、ここでも良いよね？」

何が良いのか私には全く分かりませんでした。ただ、私には返事をする事が出来ませんので、良いも悪いもありません。歩美さんは

丸い瞳を細くし笑みを作りました。それは私が了承したのだと自分の中で勝手に理解したのでしよう。

すると膝丈ほどのブロック塀跨ぎ、私の根元まで歩美さんは近づきました。そしてそこに空いている右手を使いながら穴を掘り出しました。私の根元の土はそんなに軟らかくありません。歩美さんの小さな手で掘るには限界があります。しかしそんな心配を余所よそに歩美さんは掘り続けます。

私は心配しました。歩美さんが一人で学校に来ていたからです。辺りに両親や先生方の姿が見えないので、変な大人に襲われたりしないか心配でした。すると、まるで私の心を読んだかのように歩美さんが言いました。

「大丈夫。先生が言ってたから」

私はその言葉の意味を理解するのに苦労しました。先生とはいったい誰のことを言っているのでしょうか。しかし次の歩美さんの行動でその言葉の意味がなんとなくですが、理解することが出来た気がしました。

歩美さんは自分の足の大きさ程の穴を開けると、そこに左手の握りこぶしを下ろしました。そして手を開き何か小さな白い種のようなものを穴の中に入れました。それが何の種なのか、はつきり見るこゝが出来ませんでした。お花の種かそれとも野菜の種のようにも見えましたが、はつきりとは分かりません。歩美さんのお家にはお庭が無いのかもしれませんが。だからわざわざ学校まで来て、その種を埋めたのです。ですが、なぜ私の根元に埋めたのでしょうか。それは種と一緒に埋めた小さく光に反射したあるもので納得することが出来ました。

歩美さんは種を入れるとすぐに掘り起こした土を被せ、最後にぽんぽんと子犬をあやすように土の上を叩きました。

「ここなら、忘れないね」

歩美さんはそう言い、手をはたきながら学校の校舎のほうに向かって走り出しました。

どこに行ってしまったのかと思っていると、再び走りながら戻ってきました。その両手には小さなじょうろが握られていて、どうやら中に水が入っているようでした。走ったせいで少し水がこぼれてしまっています。歩美さんはそのじょうろで先程種を埋めた場所に水をかけました。

「よし」

水をかけ終わると、今度はぎこちないスキップをしながら校舎の方へと行きました。帰ってきた時にはもう泥だらけだった手はきれいになっており、冷たい水で洗ったのか両手を摩りながら現れました。そしてまた私の方を見上げ丸い瞳を細めました。そうすると駆け足で校門から出て行ってしまったのです。

## 冬 其の弐

歩美さんがいったい何の種を植えたのか、さっぱり見当が付きません。しかしそんなことよりも、もっと大変なことがあるのです。それは歩美さんが私の根元にその種を植えてしまったということなのです。

私の根はとて太くて長いので雑草ならなんとか育つのですが、もし植物や何かの種だとすると、私の根にほとんどの栄養や水分を吸収されてしまうのです。私も春にはたくさんの花を咲かせなくてはいけません。そのためにも水や栄養は不可欠なのです。だから、歩美さんが植えた種が立派に成長することはありえないと言って良いでしょう。でも、だからといって無垢な歩美さんが植えた種をみすみす枯らしてしまうことは、私には出来ません。いったいどうすればよいのでしょうか。

おそらく歩美さんは私の隣で綺麗に咲く花のことを想像していることでしょう。しかし現実にはそうはいきません。私は考えました。

この種が立派な芽を出す方法を。

まず、誰か他の人の手を借りる方法を考えました。この小学校の校長先生はよく花壇に水を上げているのを見ます。それに人が開発した葉に付く害虫や菌などを取り除いてくれる薬品のようなものまで使ってくれたこともあります。今の校長先生は私が見てきた中で、特に動植物を大切にされている方でした。花の世話をしている時はとても幸せそうに見えます。その校長先生が歩美さんから話を聞いて、毎日のように私の根元に水をかけてくれさえすれば、私の根にも吸収する限界がありますからこの種も水を得ることが出来るでしょう。

ただ、そう簡単にはいきません。歩美さんはここまで一人で来たのです。おそらく何か秘密にしておきたいからこそ一人で来たのでしょう。彼女には友達がたくさんおりますから、その友達と一緒に来ることも出来たでしょうし、両親だって一緒にいて当然です。しかし歩美さんは一人だった。そこまで秘密にしておきたいからこそ大切な種なのかもしれません。校長先生に水を上げてくれなど頼むことはありえないと思いました。だからこの考えはひとまず白紙にしておきます。

次に考えたのは彼女自身が毎日学校に来て水をあげることです。しかしその考えはすぐに駄目だったと思いきや知らされました。翌日から歩美さんは学校に来なくなりました。それも当然です。今は冬休み、学校の宿題や遊びなどで彼女も忙しいでしょう。毎日私の前には来てくれませんでした。ただ週に一度か二度、水をあげにやってきました。相変わらず桃色のマスクをつけながら丸い瞳を輝かせていました。そしていつものようにじょうろで水をかけてくれます。それは私にとってもうれしいことでした。冬はとても乾燥しています。雨なんてほとんど降りませんし、都会の町なので雪も珍しいものです。だから彼女のかけてくれる僅かな水は、私にとって大きな癒しと温もりを与えてくれました。

しかしそれだけでは全く足りないのは明確でした。ただ、彼女はそんなこと知りませんし考えてもいないでしょう。いつになったら芽

を出すのか楽しみにして、私の前にやってくるのです。どうにかして彼女に（他の場所に移してと）伝えなくてはいけないと思い、風の力を借りて身体をせいっぱい動かしますが、歩美さんは気づいてくれません。

そして年が明けました。

人々は年明けになると、たいへん忙しくなります。まだ幼い歩美さんにも様々な行事があるのだと思います。だから、ここに種を植えたことを忘れてしまわないかとても心配でした。しかし、その嫌な予感というのはどうしても当たってしまうのです。私が再び歩美さんの姿を拝見したのは、お正月気分も覚め数日たった日の頃。ちょうど学校の三学期が始まる日でした。

少し髪の毛が伸びているように見えました。相変わらずマスクをつけており仲の良い友達と一緒にでした。私の前を横切る時に彼女は一瞬横目でこちらを見ましたが、歩みを止めることなく校舎の中へ入って行ってしまいました。

純粹のようで残酷な彼女の瞳が私のことを鋭い槍のようなもので突き刺しました。冷たい痛みが私を襲いました。

もうどうでも良いのかもしれない。そんな邪よこしまな思いが私の中を過りました。いいえ、駄目です。そんな気持ちでしたら、もしかすると歩美さんがふと種のことを思い出すかも知れません。その時私の前に来て種が成長していないと哀しむに違いありません。そんな彼女の姿を見たら、私は身を引き裂かれる思いで、自分自身を憾みます。しかしどうしたら良いものか。私は自分ができることをやることに決めました。出来る限り自分の根から栄養や水分を吸収しないようにし、種の成長を促すようにしたのです。

それは辛く厳しい毎日でした。自ら調整して吸収するのは難しいものです。種に近い根の部分に意識を集中させ続けていました。強い風が吹き荒れ校庭の砂埃が私にかかるうとも集中することをやめませんでした。

立春の頃。まだまだ木枯らしの吹く寒い季節でしたが、数日間雨の

日が続ききました。それは私にとって恵みの雨でした。しかしそれはちよつとした気休め。雨が止んでしまえば、再び集中しなければなりません。そして行く日も行く日も辛い日々が続きました。

## 春 其の弐

気が付くと私の梢で鶯が鳴いていました。校庭の隅には小さな蒲公英が綺麗なお花を咲かせています。

すると遠くの方から賑やかな声が聞こえてきました。校舎の中から真新しいランドセルを背負った一年生たちがご両親に連れられ、校門の方へと歩いてきます。陽射しに反射するランドセルの光がきらきらと輝き、とても華やかでした。

その後方に歩美さん一家もいました。歩美さんの妹さんが今年入学されるようです。歩美さんも肩ほどの身長しかなく、赤いランドセルがとても大きく見えました。妹さんの手を引く歩美さんはなんだか急に成長してしまつたかのように、もうすでにお姉さんの顔になつています。そんな姿を見たご両親はさぞお喜びでしょう。ただ、私は哀しみでいっぱいでした。

結局、私の努力も報われず種は目を出すことはありませんでした。土の中で枯れてしまつたのでしょうか。私のこと、いいえ、私の根元に植えた種のことを歩美さんが思い出しさえしなければ、それはそれで良いのかもしれませんが。

ただ、私が哀しく思っているのはそれだけではないのです。自ら栄養や水分を得ようとしなかつたせい、もう春だというのに私の枝には一輪の花すら咲いていませんでした。惨烈な姿で春の風を浴びています。

多くの子供たちが私の前で記念写真を撮る予定でしたが、私のこんな姿を見てとても残念そうにします。そして私から離れていくので

す。他の桜さんの前はとても賑やかでした。私にはもう、花を咲かせる魅力も葉を身につける気力もありませんでした。せめて歩美さんの種が芽を出してくれさえすれば、私の心持も晴れやかになったのですが。

すると歩美さんが妹さんを連れて、私の前を通り過ぎようとしてしました。その時、ちょうど妹さんが私の姿に気づいて言いました。

「あれ？　なんで咲いてないの？」

歩美さんは足を止め、私のことを見ます。そして首を横に傾げました。するとちょうど校門前で子供たちを見送りしていた校長先生が、二人に近づいて妹さんの疑問に答えました。

「もうこの桜の木は歳なのよ。そうですね、人間で言うとおおばあちゃんかしら。だからもう、枯れちゃったのかもしれないわね」

校長先生を見て、今度は歩美さんが訊きました。

「じゃ、この木はどうなっちゃうの？」

「残念だけど、新しい木に植え替えるしかないわね。でもね、この桜の木は本当に長い間この学校で生きていました。その分、いえ、それ以上多くの笑顔や幸せを私たちに与えてくれました。……ちゃんと、お金もはらいましたし」

「え？」

妹さんが校長先生を見上げます。

「ん、いえ、何でもないわ。　春野さん、あなたが入学するとき

にも笑顔をいただきましたよね？」

歩美さんは小さく頷きます。

「おそらく最期までこの木は一生懸命に頑張ったのだと思いますよ。きれいな花を咲かせようと。だからこの木の努力はちゃんと報われたと先生は思います」

校長先生の話していることが少し難しいのか妹さんはすでにそっぽを向いて、地面にあった小石に興味をひかれています。

「ほんと、お疲れさま。ありがとって、聞こえているのかしら」  
私に涙というものがあれば、おそらく私自身枯れることもなかった

でしょう。

「歩美、帰るよ」

中途半端に閉まりかけた門扉の外から歩美さんのお母さんが呼ぶと、二人は急いでお母さんのもとに駆け寄ります。その時私は、歩美さんの口許にあのマスクがないことに気づきました。

校門で校長先生にお別れの挨拶をすると、歩美さんがふと私のほうに振り向きました。そして、にこりと微笑みました。

その歩美さんの笑みはどこか歪ゆがでした。上の前歯が一本だけありませんでした。

いいえ、もっとよく見れば、わずかに歯茎の隙間に白い歯がありました。

彼女の蒔いた種は、ちゃんと立派な芽を出してくれていました。

(後書き)

感想などを頂けたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4386u/>

---

さくらのたね

2011年7月4日10時03分発行